「創価教育論」特別講演会
創立者のゲーテ論をめぐって[1]

田　中　亮　平

はじめに

本日は限られた時間になりますが、創立者のゲーテ論をめぐってお話をさせていただきます。

本日の話の流れですが、最初にゲーテとはどんな人か、これについてかいつまんで紹介します。そのあと、このほど出版された『完本　若き日の読書』（以下『若き日の読書』）について若干触れます。

続いて創立者は講演などの様々な機会にゲーテを論じられ、著作でも取り上げられていますので、その中から主なものを紹介します。

そのあとで『若き日の読書』におけるゲーテの章を詳しく見ていきたいと思います。扱われている作品は『若きウェルテルの悩み』[2]で、ゲーテの青春時代の代表作です。最初に作品の成立事情にふれまして、その上で『若き日の読書』の記述を追いながら、創立者の「ウェルテル論」を詳しく見ていきます。なかでも、この論のタイトルが「青春の混沌をこえて」となっていることから、そこに込められた意味を考えていきたいと思います。

おおむねこういう流れで進めていきますので、よろしくお願いします。

ゲーテについて

ゲーテの名前を聞いたことがある人は多いと思いますが、その作品を読んだという人となると、多くは『ファウスト』か、あるいは『若きウェルテルの悩み』にとどまると思います。そこでまずゲーテがどんな人かということですが、言うまでもなく彼は詩人、つまり詩をはじめとした文学作品を沢山残した人です。文学の主要なジャンルは古来、叙情詩、叙事詩、そして演劇とされていましたが、ゲーテはそのすべての領域で、ドイツ文学を代表する非常に重要な作品をいくつも残しています。

ここまではよく知られていると思いますが、他にも多彩な才能を持った人です。たとえば彼は

Ryohei Tanaka（創価大学文学部教授、副学長）

[1] 本稿は 2023 年 9 月 25 日、創価大学共通科目「創価教育論」で行った講演に加筆修正をしたものである。

[2] この作品タイトルに含まれる人名の日本語表記には従来「ウェルテル」「ヴェルテル」「ヴェルター」などが見られた。ここでは『若き日の読書』に従って「ウェルテル」と表記する。

本気で画家になろうとしていました。三十代の後半にはイタリアに二年近く行っていますが、目的の一つは画家の修行をして、自分にその才能があるかどうかを見極めることでした。

それから、これも一般にはあまり知られていないのですが、自然研究者でもありました。彼の自然研究は、とりわけ二十世紀に入って注目を集めていて、量子力学の不確定性原理で有名なハイゼンベルクという物理学者もゲーテを論じているほどです。

加えてゲーテは政治家でもありました。小国ではありましたが、君主の公爵に次ぐナンバー２の財務長官に任ぜられるほど、有能でかつ公爵の信頼も厚かったのです。とりわけその領地の首都ヴァイマルに二十六歳で移り住んでからのおよそ十年間は、懸命に公爵国の経営のために尽力しています。

このように、非常に多方面の才能を持った人で、ルネサンス時代のレオナルド・ダヴィンチを彷彿とさせるような人でした。

つぎに、いつ頃の人かということですが、彼が生まれたのは 1749 年で、十八世紀のちょうど真ん中くらいです。亡くなったのが 1832 年のことなので、八十二年の生涯でした。日本で言えば江戸時代の中期、第九代将軍家重の頃に生まれ、江戸時代の後期、天保の大飢饉の前の年に亡くなっています。

どこの人かについては、考えるまでもなく当然ドイツの人でしょうと思うかもしれません。しかしゲーテが生まれた当時は今日のドイツにあたる国はありませんで、形式的にはまだ神聖ローマ帝国という中世以来の帝国が残っていました。しかしその実態は三百を超える独立の小国家の集合体でした。その中には帝国自由都市という自治権を認められた都市があり、ゲーテが生まれたのはその一つのフランクフルト・アム・マインでした。現代では日本でもソーセージの名前でなじみ深い街ですが、ドイツ中心部のヘッセン州というところにあって、世界でも最大級の国際空港を擁し、ヨーロッパの金融の中心地でもあります。

そのゲーテはどんな作品を残したかということですが、『若きウェルテルの悩み』と『ファウスト』の他には、まず叙事詩の傑作『ヘルマンとドロテーア』があげられます。叙事詩というのは日本でいえば『平家物語』のように、一定の詩形にのっとって綴られていく長編の物語詩です。近代の文学では詩の形で長編の物語を作るということはまれで、もっぱら散文の物語、つまり小説が普通になっています。しかしゲーテは小説の名作も書く一方で、古典的な叙事詩の形でも傑作を残していて、この『ヘルマンとドロテーア』はその代表作です。非常に美しくて素晴らしい感動作です。

いっぽう小説では『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』およびその続編の『遍歴時代』や『親和力』などの長編に加え、『ノヴェレ』をはじめとするいくつもの短編の名作も残しています。

このほか、演劇の原作である戯曲の分野では、ベートーベンが音楽をつけた『エグモント』をはじめとして、『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』、『トルクヴァート・タッソー』、『イフィゲーニエ』などが知られています。また、シューベルトの作曲で知られる「野ばら」や「魔王」をはじめ、おびただしい数にのぼる詩も残しています。ゲーテの自伝も有名で、誕生から青年時代ま

でをつづった『詩と真実』や紀行文学の名作とされる『イタリア紀行』などがあります。

このようにゲーテはあらゆる文学のジャンルにわたって、不朽の名作を残していますが、それ以外の自然科学関係の著作、手紙や日記などもすべて網羅したヴァイマル版ゲーテ全集というものがありまして、それは全部で 133 巻を数えるほどです。

『完本　若き日の読書』

さて、そのゲーテについては創立者池田大作先生が折に触れて論じておられることは皆さんご存じだと思います。その創立者が青年時代の読書体験をつづった『若き日の読書』と『続若き日の読書』という本がありましたが、今回それが合本となって『完本　若き日の読書』として新装出版されました。旧版も私にとって非常に懐かしい本ですが、さっそくこの新版も手に入れて改めて読んでみたところ、懐かしいだけではなく、かつては気付かなかった意味深い箇所が色々と発見されて、新鮮な驚きを感じることができました。

読むたびに新しい発見がある、これは名著の名著たるゆえんだと思います。その意味で、この『若き日の読書』は名著の名にふさわしいと言えますが、それに加えてこの完本版には得難い特徴がもう一つあります。それは創立者が二十歳前後に書きしるしていた、いわゆる「読書ノート」が巻末に特別収録されているということです。

はじめに、どんな発見があったかということですが、その例としてゲーテとは一見関係のない作家について論じられている章の中に、ゲーテと意外なつながりがあるということを紹介します。

正編の方に高山樗牛、本名林次郎が残した『樗牛全集』についての章があります。高山樗牛は三十一歳で亡くなっていますが、創立者はその晩年の日蓮研究について考察されています。それ自体非常に興味深い内容となっていますが、読み進むうちに樗牛とゲーテの関わりを思い出されました。つまり、この高山樗牛という人は、明治 24 年に日本で初めて、本格的に『若きウェルテルの悩み』を訳した人でもあるからです。ただし、全部ではなく全体の八割ほどにとどまるようですが、この訳は「山形日報」という新聞に『淮亭郎の悲哀』と題して連載されました。

二つ目は内村鑑三です。創立者は内村がその著作『代表的日本人』で、権力から独立した日蓮像を提示していると論じています。この内村鑑三も意外にゲーテと関係があって、『月曜講演』と題された講演シリーズの一つに、ダンテとゲーテを比較しつつ論じたものがあり、そこで『ファウスト』を取り上げています。

三番目にカーライルです。内村もこの人を『月曜講演』のテーマにして論じていますが、十九世紀のイギリスを代表する評論家、歴史家です。今回の完本には、末尾に「読書ノート」が収録されていることは申し上げましたが、そこにカーライルの小説『衣服哲学』からの抜き書きが全部で十箇所ほどあります。この作品は、ゲーテの晩年の長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に描かれる教育哲学に強い影響を受けた作品です。

カーライルはゲーテの晩年のおよそ八年間、往復書簡を交わすなどして親交を深めていました。当時彼は新進気鋭の作家で、積極的にドイツ文学の作品をイギリスに翻訳紹介していましたが、

なかでもゲーテを師と仰ぐほど心酔していました。ゲーテの方でもカーライルの才能を高く評価し、言語や文化を超えた相互の文学の紹介と交流につとめる彼の仕事に、自身が提唱する「世界文学」の実践を見ていました。この「世界文学」については、またあとで触れたいと思います。

このように『若き日の読書』は、ゲーテとの関わりという面だけから見ても、いくつもの発見と驚きが待っている本です。

創立者とゲーテ、おもな著作

つぎに創立者とゲーテの関わりについて概括的にお話しします。

創立者は繰り返しゲーテのことを論じられますが、そもそもなぜゲーテなのか。このことに関しては『創価教育』第16号掲載の報告で考察していますので、詳細はそちらを参照してください。まとめますと、終戦直後に苦闘の青春時代を送りつつも読書を通じて深く人生の意義に思いを巡らせていた若き創立者にとって、すでにゲーテが重要な存在であったことを、当時の「読書ノート」から浮き彫りにしています。

その後も創立者は長い年月にわたり、講演や論考で折に触れてゲーテを論じています。そのはじめは1978年に出版された『私の人物観』という書物です。歴史上有名な人物を論じた十八章のなかに「不滅の巨峰・ゲーテ」という章もあります。創立者はそこで非常に巨視的な視点をとり、ルネサンス時代のダンテと比較しつつ十八世紀のゲーテを現代の視点から論じています。

その十年後に上下二巻の『私の人間学』が出版され、その上巻で『ファウスト』が論じられました。この長大な戯曲は二つの部に分かれていて、第一部のはじめの方に、ファウストが聖書の中の「初めにロゴスありき」という一節を、ギリシャ語からドイツ語に翻訳する場面があります。宇宙万有のそもそものはじめに在ったのはロゴスであるという意味ですが、ここにあるギリシャ語の「ロゴス」を、宗教改革者で聖書のドイツ語訳も作ったマルティン・ルターが「ことば」と訳しました。ファウストはこの訳に飽き足らず、「意味」、「力」と訳し直し、最後に「行為」と訳して満足します。

ロゴスは通常では理性や論理、言葉などと訳されますが、ゲーテはファウストに世界を創るものは「行為」「実践」であると考えさせ、学問の世界を脱して行為の世界へと向かわせます。あらゆる体験を可能にするため、悪魔メフィストと契約し、時空を超越した経験を積み重ねた末に、ファウストがたどり着いたのは、他者のために生き、他者と協働して生きるという境地でした。

この『私の人間学』で展開された東西の哲学の比較、つまり西洋の理性中心主義に対して、行為と実践を重視する立場を東洋に求めるという形の比較、それがファウストの聖書翻訳の場面とともに、ゴルバチョフとの対談『二十世紀の精神の教訓』でふたたび論じられます。

2000年代に入り、月刊誌『潮』で『世界の文学を語る』という連載対談が、十二回にわたって掲載されました。ここでも創立者は連載の三回分をゲーテにあてています。「不滅の巨峰ゲーテの詩と真実」というタイトルを冠していて、ゲーテの人間像を交えながら、大まかに青年時代、壮年時代、そして晩年と、三つの時代に区分して、それぞれの代表作を論じるという流れになっています。ゲーテの壮年時代の回では、1796年に完成した長編小説『ヴィルヘルム・マイスター

の修業時代』に焦点が当てられます。ヴィルヘルムという一人の青年の成長、自己陶冶、すなわち自分自身を教育すること、そしてこれを通じた人間形成をテーマにした長編小説です。

他にも青春時代の回では『若きウェルテルの悩み』が、晩年の回では『ファウスト』が論じられますので、この『世界の文学を語る』はそれまでの創立者のゲーテ論を集大成にしたような内容と規模を備えています。

しかし、そのあとも創立者のゲーテへの関心は衰えることなく続きます。二年後の 2003 年の創価大学における特別文化講座『人間ゲーテを語る』については皆さんもよくご存じと思います。こうしたゲーテに対する長年の取り組みを顕彰して、創立者にドイツのヴァイマル・ゲーテ協会からゲーテ・メダルが贈られたのは 2009 年のことでした。

『若きウェルテルの悩み』について

『若き日の読書』に話を戻しまして、はじめにも述べたように、そこでのゲーテ論は『若きウェルテルの悩み』がテーマになっています。この小説の成立事情については、本文にも簡潔に紹介してありますが、少し詳しく見てみたいと思います。

ゲーテは 1772 年、二十二歳の時に法律実習を受けに、フランクフルトの北にあるヴェツラーという町に赴きます。そこでシャルロッテ・ブッフ、愛称ロッテという女性と出会い、恋に落ちます。この人にはすでにケストナーという婚約者がいたわけですが、ゲーテが最初に知り合ったのはこのケストナーの方で、その関係で後にロッテを知ったという順になります。ケストナーは小説の中ではアルベルトの名で登場します。ともあれ、三人は友人として付き合うわけですが、ゲーテの方はだんだんロッテに対する恋心を募らせていきます。しかし数か月の後についにゲーテは身を引く決意を固めて、実習の期間が終わるのをしおに、ヴェツラーを去ります。現実のゲーテとロッテの関係にはこれでいったん終止符が打たれる形になります。

ところがここで別の事件が起こります。10 月 30 日、ゲーテが去って二か月も経たないうちに、法律の実習仲間のイェルーザレムという人が、ヴェツラーでピストル自殺をします。この知らせが故郷に帰っていたゲーテのもとにも届くわけです。ゲーテはヴェツラーに趣き、友人イェルーザレムが死んだ事情について「きわめて正確で詳細な記述を読んだ」[3] のです。

この次の年、ケストナーとロッテは結婚式を挙げて、正式な夫婦になりますが、その翌年の 1774 年の 2 月にゲーテはこの小説を書き始め、4 月に完成させます。9 月に出版すると、その反響は途方もないものでした。

のちにゲーテ本人も自伝の『詩と真実』で、この時の反響の大きさについて述べています。なぜこれほどまでに大きな反響をこの小説が引き起こしたのかということについて、ゲーテは、若者たちが当時の身分社会の様々な制約の中で、不自由さや、拘束感に苦しんでいた点を指摘しています。こうした生きること自体が苦しいという、世界苦ともいえる生活感情を抱く中で、この

---

[3] 河原忠彦訳『詩と真実』第三部 ,『ゲーテ全集』第 10 巻所収 . 潮出版社 , 1980 年 , 138 頁 .

『ウェルテル』を読んだ人が多かった。彼らは破滅しゆく主人公の姿に、これは本当にもう自分たちの閉塞感、やり場のないもどかしさを代弁してくれる作品だと受け取った。このようにゲーテは言っています[4]。

青年たちのこうした熱狂的な受容は、ドイツ人の間にとどまらず、フランスやイギリスをはじめヨーロッパ全域に及び、大きく長い影響を及ぼし続けることになります。

小説のあらすじについては『若き日の読書』に紹介されていますので割愛しますが、今日でも小説の舞台となったヴェツラーの町を訪ねますと、実際のロッテが住んでいた家、ゲーテが泊まった宿、イェルーザレムの住居などが残っていますし、小説に描かれる場面のモデルになった場所もいくつか辿ることができます。

「青春の混沌を超えて」

さてこの『若きウェルテルの悩み』の章には「青春の混沌を超えて」という題がついています。最初に創立者はドイツの再統一を話題にしています。1989 年の 11 月にベルリンの壁が崩壊し、翌年 10 月に四十年間東西に分裂していたドイツが再統一されました。この章はその二年後の 1992 年、創立者が前年に続いてドイツを訪問した様子が述べられた後、再統一が話題にされます。

> 今回のドイツ訪問は、東西ドイツの統一後、二度目となるが、思えばゲーテは三十六もの国々が分立していた当時、すでにドイツ統一の可能性について語っている。
> ゲーテは言う。
> 「立派な道路ができて、将来鉄道が敷かれれば、きっとおのずからそうなるだろう」
> 彼は続ける。
> 「しかし、何をおいても、愛情の交流によって一つになってほしい」と。

これに続いて創立者は、この時集い合った人たちの中には旧東独からの参加者もあり、「様々な障害を越えて心と心の交流を深めゆくドイツの友」の姿を紹介します。その姿に創立者はゲーテが言った「愛情の交流」の実現を見ていました。

しかし、はじめは熱狂的な歓喜に包まれたドイツの再統一でしたが、やはり簡単には進まなかった面もありました。政治的な統一については、反対意見もありましたが、順調に進んだ方だと言えます。しかし経済の面では、ほぼ破産に瀕した状況の東側の経済を立て直すために、西側は大きな財政負担を強いられることになりました。しかし経済の格差は非常に大きく、特に東側の国民にとって不利な状況がなかなか改善しませんでした。

政治や経済と並んで、むしろそれ以上にむずかしい問題だったのは心の格差でした。東側出身

---

[4] 同書 , 142 頁

の人は劣等感に苦しみ、西側出身の人は東の人を厄介者扱いして見下す。やがて互いを蔑称でののしり合うという現象も生じました。創立者は「心の「分断の壁」を壊すこと」が喜びの調和の時代へと転換していくカギであると述べていますが、それは現実に必要なことだったのです。

ところで創立者はゲーテがドイツ統一を予見していたことを挙げていますが、この予測について少々触れてみたいと思います。ゲーテが予測したドイツの統一ですが、紆余曲折を経て最終的に実現したのは 1871 年のことでした。まだまだ四十年くらい必要だったわけです。

この予測は秘書役のエッカーマンに語った言葉ですが、この時ゲーテは続けて、統一したらどんな利点があるかを数え上げていきます。一つの国にまとまれば、よその国に攻められたときに団結して対応することができるという点に続いて、通貨の統一、関税の撤廃があげられます。三十六も国があると、そのそれぞれの国境を超えるたびに関税が取られるからです。さらに旅券の統一、度量衡の統一や商業・貿易のルールの統一などの利点があげられていきます。

ところが、その後はむしろ統一に伴う否定的な面が述べられていきます。それはドイツの地方文化の側面です。中央集権的な権力が発達せず、小国分立の状態が長く続いたドイツは、各地方に独立した文化圏が発達しました。ゲーテはそのことを評価しており、もし統一によってこうした地方文化の独自性が失われていくとすれば、統一はむしろ疑問だとも述べています[5]。

こうした伝統の影響は今日のドイツにも残っていると言えます。現代のドイツは連邦制をとっていて、十六の州から成り立っています。州は国家と見なされて議会や政府の権力も大きく、なかでも教育制度、文化政策、地方自治法や警察法について立法権を持っています。つまり今日のドイツの連邦制は、連邦の持つ国家としての統一性と、十六の州が持つ自治権に見られるような地方分権性とのバランスの上に成り立っているわけです。

ゲーテが「愛情の交流によって一つになってほしいものだ」と述べたことの背景には、何百年にもわたる小国の分立と対立の歴史があり、それを克服することによって統一の利益を享受することを期待する一方で、地方の文化の独自性も大切にしたいとの思いが込められていたことが分かります。

さて、「青春の混沌を超えて」の章は、このあと『若きウェルテルの悩み』の成立と、内容のあらましの紹介にうつり、続いて自殺がテーマになります。大人から子供までだれもが愛さずにはいられない若者であったウェルテルが、最後にはピストルで自殺するという衝撃的な結末は、この作品の途方もない反響の大きな要因になったと言えます。

創立者は自殺に対するゲーテの立場を始めに次のように確認します。

> もちろん彼は、自殺を賛美など決してしない。むしろ、どこまでも「生きていくこと」こそ、人生にとって重要であると何度も何度も繰りかえす。

---

[5] ヨハン・ペーター・エッカーマン著 , 山下肇訳『ゲーテとの対話』下巻 . 岩波書店 , 1969 年 , 235 頁以下 .

その上でゲーテの『西東詩集』の一節が引用されます。

> わたしは一箇の人間だった、それは
> すなわち、戦士、ということだ。

英雄が死んでから迎えられる天国があって、入口の見張り役のもとへ一人の人がやってきます。見張りはこの人に、あなたはどんな英雄的な行為をしてきたのかと尋ねます。それに答えた言葉がこの詩です。一人の人間であるということは、苦難と戦い、それを乗り越えたものということだ。生きるというのはそういうことなのだと言っているわけです。

この一節を受けて創立者は次のように続けます。

> 人生とは、悩みとの戦いの異名――そのなかを一歩一歩と進むなかに、真の充足があることを、ゲーテはこの一言に凝縮している。逃げてはいけない。また、避けてもならない、と。彼が描き、謳い、創造したもの――それは現実に生きる「ありのままの人間」にほかならなかったのである。

その一方で、ゲーテは多感な青春時代にあって、非常に激しい感情の振幅を経験していました。この時代をつづった自伝の『詩と真実』に非常に有名な印象深いエピソードがありまして、創立者もそこを引用しています。

> 当時を回想し、『詩と真実』のなかでゲーテは語っている。
> 「いつもこの短剣をベッドの脇におき、明かりを消すまえにその鋭利な切っ先を二、三寸、胸の中に突き刺せるだろうかと試してみた」と。
> 『ウェルテル』の物語は、若きゲーテの体験にもとづいていた。ゲーテ自身、内面に湧きあがる青春の激情と戦っていたのである。そして「憂鬱そうなしかめ面を取り払って生きることに決心」をする。

どんなに辛いことがあっても、それでも生きていこうと決めたということです。『詩と真実』では、この続きのところでこのように書いています。自分が前に進むためには、それまでの自分が悩んだこと、これを一回作品にしなくてはいけない。詩人を自称する自分としてそれは使命である。今までの自分の苦悩を作品化することで、次のステップへ向かうと決意した。これまで悩んできた重要な問題とは自殺のことで、それに関して感じ考えてきた一切のことを、言葉に表現しなくてはならないと感じた。

しかしそれを形にする材料がなくて悩んでいたところ、彼がロッテたちのもとを去ってしばらくしてイェルーザレムが死んだという訃報に接したわけです。調べていくとイェルーザレムが自

殺したのは、人妻への恋が成就しないことに絶望したためだということがわかってきた。その瞬間、ウェルテルの構想が全部できたと書いています。

執筆までにはまだ一年余りの時間が必要だったわけですが、それは「意義深く、多様な内容の作品を自分の心にありありと思い描き、その部分部分をすべて書き上げること」が、構想が出来上がるよりももっと重要なことだったからだと述べています。

ところでここで一つ疑問が湧いてきます。『ウェルテル』の成功の原因について、『詩と真実』では当時の若者たちが非常な閉塞感に苦しみ、自己崩壊の状況にあった中で、それが導火線のような役割をしたのだという描写があることはすでに述べましたが、その一方でこの作品は長きにわたって、しかも言語や国境を越えて読み継がれてきた作品でもあります。ゲーテが言うように時代の固有の産物であったのか、あるいは時代状況に左右されず、それを超越した作品だったのかという疑問です。

実際『詩と真実』の上記の記述とは違って、エッカーマンが残した記録でもこのことが話題になっています。エッカーマンが『ウェルテル』というのは、時代の産物というものではないと思うと言い始めます。それは様々な時代の、どんな若者たちに対しても当てはまる内容をもっている。ほかの時代の若者たちもそれぞれ特有の苦悩を抱えていて、それを乗り越えていかなければならない。しかし乗り越えられない人たちは破滅していく。そういう普遍的なものだといいます。エッカーマンの伝えるところでは、これについてはゲーテも納得したとなっています[6]。

創立者はこの章のタイトルを「青春の混沌を超えて」としていますが、これにはどういう意図があったのでしょうか。青春時代はさまざまな悩みが次々襲ってくる。しかも人生の方向性がまだ定まっていない時期であり、さまざま判断に迷うことも多い。そういう意味で混沌、「カオス」の時代であると言えます。しかしカオスの次には、コスモス、つまり宇宙という秩序が創造されることになっています。

混沌を乗り越えた先に創造の人生が開けてくるわけです。ゲーテの場合にもロッテをめぐる恋の悩みをはじめとして、対人関係や社会生活の悩みがありました。彼はそういうものを作品化することによって乗り越えた。創立者はこれを総括して、青春時代の悩みはより高い自己を創りだすための悩みであると述べています。

ゲーテは『ウェルテル』を書き終えた時の心境を次のように述べています。

> まるで総懺悔をすませたあとのように、私はふたたび快活で自由になった気分で、新しい人生を歩みはじめる資格を得られたように思った。昔からの家伝薬が、こんどは素晴らしい効能を発揮した。現実を詩に変えたことによって、私の方は気分が軽く晴れやかになったが、友人たちはこの作品によって心をかき乱されてしまった[7]。

---

[6] 『ゲーテとの対話』下巻 . 44 頁 .

[7] 『詩と真実』第三部 . 141 頁 .

「昔からの家伝薬」というのは、その次にある「現実を詩に変えた」ということで、自らの体験から生じた悩みを、作品化することで乗り超えることを指しています。

創立者は、ゲーテがエッカーマンに語った有名な言葉を引きます。

> 誰でも生涯に一度は『ヴェルテル』がまるで自分ひとりのために書かれたように思われる時期を持てないとしたらみじめなことだろう[8]。

「自分ひとりのために書かれた」という思いは、この作品の素材である主人公の悲恋に即して考えると、この主人公のような恋愛を経験しない人は可哀そうだと意味に解釈できます。しかし創立者が書いているように、この書の精神的な内容は、恋愛を素材としながら、それに代表される青春時代の多様な悩み、混沌を乗り越えることであり、その点にゲーテの発言の重心があったととらえることもできます。

それを裏付けるように、創立者はゲーテのこの発言の直前の部分も引用しています。

> 個人は誰でも生まれながらの自由な自然の心を持って、古くさい世界の窮屈な形式に順応することを学ばなければならないのだ。幸福が妨げられ、活動がはばまれ、願望が満たされないのは、ある特定の時代の欠陥ではなく、すべて個々の人間の不幸なのだよ。

「世界市民」ゲーテ

ゲーテの章の末尾で、創立者は「世界市民ゲーテ」に焦点を当てます。

> 百七十年余りまえ、彼はすでに、「世界市民」との言葉を使っている。激動の時代を目のあたりにした文豪が、心から待望したもの――それは、民族的な先入見や偏見を乗り越えた「人間」の登場であった。

ここでゲーテが使ったとされる世界市民という言葉は、『温和なクセーニエ』という晩年の箴言詩集の中に出てきます。この詩集は全部で第六集までありますが、そのうちの第五集にこのような一節があります。

> あらゆる都市いろんな町村にうちつどう
> 兄弟たちに挨拶をおくる。
> 私は世界市民
> ヴァイマル人[9]

---

[8] 『ゲーテとの対話』下巻 . 45 頁 .

[9] 飛鷹節訳「温和なクセーニエ」.『ゲーテ全集』第 1 巻所収 . 潮出版社 , 1979 年 , 376 頁 .

「世界市民」にあたるドイツ語は今日では「ヴェルトビュルガー Weltbürger」あるいは「コスモポリート Kosmopolit」を使いますが、ゲーテは「ヴェルトベヴォーナー Weltbewohner」というドイツ語を使っています。「世界の住民」という意味です。つまりどこの住民かと問われれば、世界の住民であり、ヴァイマルの住民でもあると言っています。住んでいるところを現実の地名で言えばヴァイマルだが、自分の精神的な住まいは世界であるという意味に解釈できます。また、さらに進んでヴァイマル自体が世界的な水準の文化芸術の広がりを持った都市であると解釈することもできます。

この詩の続きの部分には「この崇高なまどいに / わたしは教養という点で参加したが」とあります。これには自分自身がその水準に至るために貢献してきたという意味が含まれているとも言えます。その結果、ゲーテにとってヴァイマル人であることと世界市民であることは同一の意味を持つことになるわけです。

創立者は続いてゲーテが待望した世界市民は「民族的な先入見や偏見を乗り越えた「人間」」であると述べています。これに関連して、晩年のゲーテが提唱した「世界文学」の理念に触れたいと思います。「温和なクセーニエ」の第五集は、1827 年出版の全集の第四巻に収録されました。それとちょうど同じ時期にゲーテは、「世界文学」という言葉も使い始めています。

エッカーマンによれば、1827 年 1 月末にゲーテがこのように言ったとあります。

> 国民文学というのは、今日では、あまり大して意味がない、世界文学の時代が始まっているのだ[10]。

ゲーテという人は、ドイツにまだ国民文学と言えるようなレベルのものがない時代に、その国民文学創出の旗手としてデビューしました。『若きウェルテルの悩み』のヨーロッパレベルの成功は、ドイツ文学のステータスを一気に上げることに貢献しました。つまりゲーテは国民文学の理想をみずからの実作を通して実現した人なのです。

その彼が七十七歳の最晩年に国民文学は今ではあまり意味がないと述べたわけです。その理由は、国民文学が民族固有の文化を称揚し、民族の文化的な特徴を重要視する文学であるという点にあります。晩年のゲーテが考える世界文学は、国民間の文化的な交流が次第に盛んになっていく状況を踏まえて、国民文学の枠に固執する時代を超えて、国境を越えた交流と共同作業の上に創造されていく文学というものでした。

この世界文学の提唱が、上記の「世界市民」の詩句の発表と時期が重なっているのも偶然ではないわけです。ゲーテがなぜこうした考えに至ったのか、上記のエッカーマンの記録の直前の言葉から窺えます。

---

[10] 『ゲーテとの対話』上巻 . 292 頁 .

> われわれドイツ人は、われわれ自身の環境のようなせまい視野をぬけ出さないならば、ともするとペダンティックなうぬぼれにおち入りがちとなるだろう。だから、私は好んで他国民の書を渉猟しているし、誰にでもそうするようにすすめているわけさ。

ペダンティックな人というのは、中途半端な学識にうぬぼれて、それをひけらかす人のことですが、ゲーテは自国民にそうした傾向があることを危惧しています。民族を超えて諸外国の人々の考えに積極的に触れ、そこから学んでいくことで、そうした危険を乗り越えることができる。だからみんながこの世界文学の時代を促進するように努力すべきで、諸外国の志を同じくする人と大きな共同体をつくるべきだと訴えています。

ゲーテが心から待望したのは、民族的な先入見や偏見を乗り越えた「人間」の登場であったと創立者は述べています。「世界文学」の理念の中にも、こうした「世界市民」への期待が息づいていると言えます。

結びに

ここまで創立者の『若きウェルテルの悩み』論を見てきましたが、全体を振り返ってみると、この見ようによっては深刻で悲惨な内容の作品について、創立者が非常にポジティブな観点から考察していることが感じられます。それは青春の悩みを越え出て、その先にあらたな創造的発展を生み出していく姿勢であり、ゲーテ本人がその実践者であったという観点です。

冒頭にはドイツ再統一の話があり、ゲーテは愛情による統一こそ望ましいと述べました。創立者はこれをうけて、心の「分断の壁」を壊すことがカギであるとしています。さらに「世界市民」を自負し、「世界文学」を提唱した晩年のゲーテ、彼が憂えていたのは民族的な偏見や先入見で、ドイツ人はともすればそれに陥りやすいということでした。創立者も偏見や先入見といった「心の束縛」を断ち切った「世界市民」の登場こそ真実の平和を実現する決定打であると結んでいます。

このわずか十一ページの小論には、ゲーテ時代と現代を結ぶ視点が縦軸となっており、今後の未来への展望と実践が加えられています。また一方では個人の苦悩と世界苦という時代を超越したテーマが横糸となっていて、全体として重層的かつ力動的な叙述をなしています。

こうした内容面だけではなく、最初の「心の分断」と最後の「心の束縛」、すなわち平和社会の創出に向けて人類が超克すべき課題が、冒頭と末尾で呼応し合っていることにも気づかされます。こうした構成の妙が、表現の要を得た簡潔さとも相まって、形式面でも学びの多い一章を形作っていると言えましょう。